

感想文

皆さんがそれぞれの想いを胸に被爆地広島を訪れました。
そして、たくさんのことを見て・聞いて・感じてきました。
ここには、平和の旅をとおして印象に残ったことを、
ありのままに書いてあります。

今回旅に参加したみなさんには、

広島はどう映り、何を感じたのでしょうか。



※原則として、感想文などは原文のまま掲載しています。

『伝えるということ』

S・Y

広島原爆の爆心地である島病院から北西へ僅か160m程の至近距離であるにもかかわらず、原爆投下から71年を経た今尚もしっかりとその形を残し、その当時を色濃く残す「原爆ドーム」。

それは原爆が広島にもたらした「むごさ」や「いたましさ」というものを後世に伝えるものとして存在し、近年世界文化遺産にも登録されたようであるが、実際にあの建造物を目の当たりにし体感することで「原爆ドーム」というその存在意義を明確にした。

原爆、被爆、そして戦争を伝える決して語らない存在、「原爆ドーム」。

また、広島平和記念資料館で観た原爆の恐怖を語らずして伝える遺品、写真の数々。

そして原爆被害者福祉センター広島平和会館で当時小学校1年生であったという被爆体験者桑本さんから語られる原爆が投下された広島での悲惨な原体験。その話中、桑本さんは何度か涙ぐむことがあった。それは「疎開先で食料を盗んだと疑いをかけられたとき」、そして「原爆投下によって亡くなった遺体を様々な場所で焼いている匂いが住居にまで入ってきて頭がおかしくなりそうになったというとき」など。桑本さんが流すその涙は原爆ドームや広島平和記念資料館で観た静止物から感じるものとは異なり、素直に聞き手の心に訴え掛け

てくる非常に熱量のあるものであった。

旅を終え、数日ふと思う。原爆ドームや広島平和記念資料館で観たものたちはこれからも同様に保管され後世に伝えられるであろう。

ただ、何よりも伝え、残さなくてはならないものがある。

それは語り部の言葉たち。

戦後71年も経つと悲しくもあるが語り部は自ずと消えていく。当時そこで体験した生きている人間だけがその五感を通して感じられた様々なもの。

生きている人間だけが感じる事が出来る色や匂い、音。

そしてその人間だけが出来る身体を通し伝え、語られる言葉の数々。

これらの言葉たちを何かしらの形で歪曲なく後世に伝えていくこと。それが平和を望み願う人間としての責務であるのではないか。

旅に参加する前の広島のイメージ

- 世界で最初の核兵器（原子爆弾）の投下
- 世界文化遺産原爆ドーム
- 日本三景宮島

旅に参加した後の広島のイメージ

- 恒久平和を願う都市
- 原爆と共存
- 地元愛
- 水平的

『原子爆弾が起こすこと』

K・Y

広島平和の旅の2日間、いくつかの資料館などに行きました。

1日目に行った福山市人権平和資料館では、疎開先で食べていた食べ物などが展示されていました。当時は現在のように「好きな時に好きなものを食べる」という当たり前のことが出来ず、お米もわずかばかりで非常に大変だったそうです。

2日目は平和記念式典に参列しました。

式典会場は非常に静かで沢山の参列者が居るにもかかわらず、黙祷の時間はそこにだれも居ないような静かな時間が流れ、参列者や広島の人たちは8月6日をととても大切に思っているのがよくわかりました。

広島平和記念資料館では人の髪の毛や被爆した三輪車、実際に触れる瓦やガラスびんなどが展示されていました。髪の毛は3回ほどクシを通したら全て抜け落ちてしまったそうで、とても怖さを感じました。また皮膚がただれ、ケロイドになってしまったり、このような事が起きるのは被爆などが原因です。

こんな恐ろしいことが71年前に実際に日本、広島で実際にあったのです。

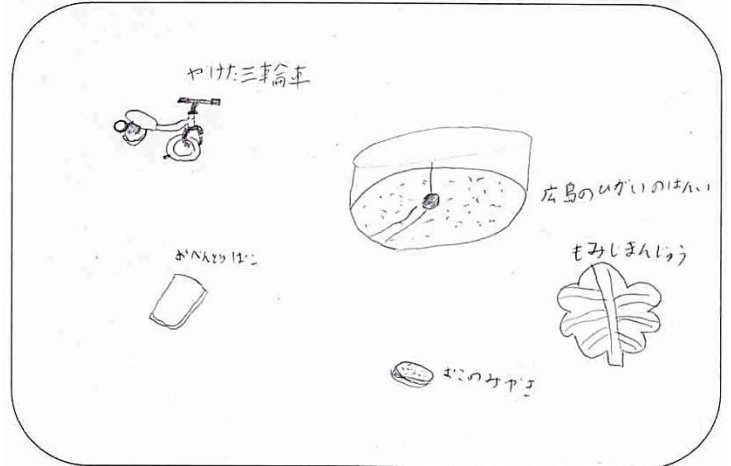
広島で起きたことを色々観たり、被爆者の方のお話を聞いたりしたことで色々と考えました。

今まで当たり前のように幸せに生きていたこと、平和であることに感謝して、これからは今まで以上に大切に毎日を過ごして生きていきたいと思います。

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加した後の広島イメージ



『71年目の広島』

大山 安男

「もし、広島の方へ旅をする機会があったら爆心地まで行かなくても市内のどこかで2～3秒でも、中心部の方を見て手を合わせてくれる？」

同期入社した友人の50数年前の言葉である。彼は広島県の出身。私は仕事の忙しさや生来の怠け癖が出て広島を訪ねる機会がなかった。

この度、市のご好意で71年目の広島を訪ねる機会に恵まれた。

「あの日」広島は焦土と化したが今はその面影はない。東京と同じで日本人の勤勉さで街は実に美しく生まれ変わっていた。そのかげには広島県人特有の強い心と郷土愛があったのだと思う。被爆体験者の先生の話や先生と同じ昭和14年生まれの私は自分の生いたちを久し振りに考えることが出来た。

平和記念館

被爆体験者の講話

袋町小学校の資料館 等々

時間的に限られ足早だったが十分に今回の「広島平和の旅」は私の心の中に重く受け止めることが出来た。

今でも1年で数千人の人々が体調をくずし「鬼籍」に入るといふ。心が痛む。この先もどれだけの人の命、家庭、そしてその1人1人の未来が奪われたのか、又残された方々の思いを重く受け止めたいと思う。

炎天下行動を共にしてくれた事務局の方、市民の方に感謝し、そして3人の

小学生に夏休み素晴らしい勉強が出来たこと二学期も頑張ると願っている次第である。

旅に参加する前の広島イメージ

- 暗い街
- 行きたいと思う街ではなかった。



旅に参加した後の広島イメージ

- 発展していて非常にきれいな街



『ヒロシマ』

羽広 旺子

「原爆」今までは教科書、映像、被爆経験者の方からの知識だけでした。

原爆ドーム、平和記念資料館見学、平和祈念式典参列、感無量でした。資料館では、直視できませんでした。あまりにもひどい、可哀想すぎます。改めて思いました。

私が初めて知ったのが「福山空爆」広島原爆の2日後でした。予告された空爆だそうです。多くの犠牲者が出ました。母と子の3人像を見た時、胸があつくなりました。袋町小学校平和資料館、伝言文が壁に残されている小学校、ここでも子どもたちが犠牲になりました。熱かったでしょう。痛かったでしょう。でもそんな感じないまま犠牲になってしまったかもしれませんね。

「平和」大切だと思います。

百聞は一見にしかずと申します。本当にその通り、大変貴重な思い出、経験になりました。有難うございました。

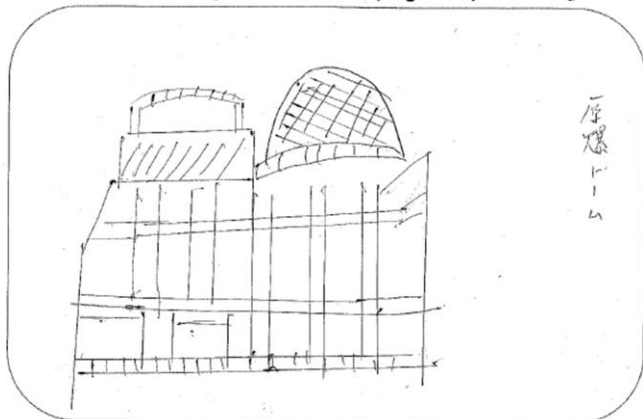
私が子供の頃、耳にした歌が疎覚えですが、歌っていましたね。

ふるさとのまちやかれ　みよりのほねうめしやけつちに

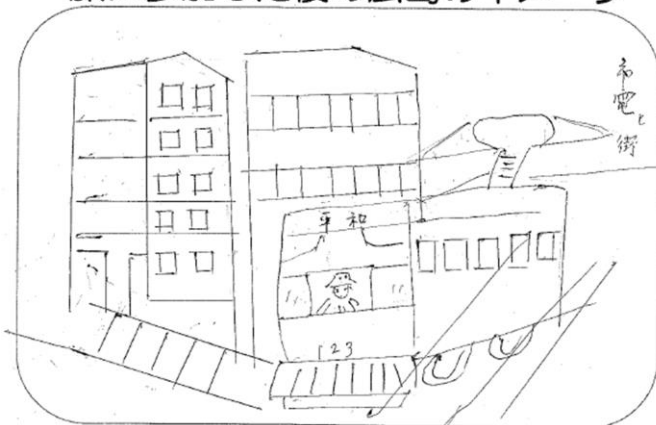
いまはしろいはなさしく　ゆるすまじきげんばくを

みたびゆるすまじきげんばくを　われらのまちに

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加した後の広島イメージ



『二度としてはいけない戦争』

松浦 竜斗

ぼくは、家族で「はだしのゲン」のビデオを何回か見たことがあります。本当に戦争があったのか、原ばくドームは本当にあるのか、自分で行ってみたいと思い1泊2日の旅に行きました。

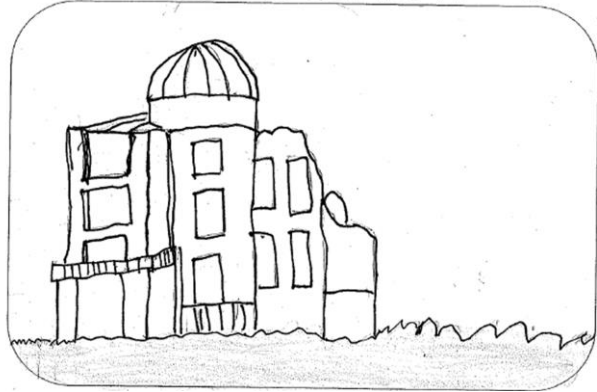
1 日目は、福山市人権資料館へ行きました。ここでは、本当に使われたばくだんや母子三人像がかざられていました。ばくだんを1つもたせてもらったらとても重たかったです。そのばくだんを110こ集めて落としたと聞いてみんな生きたかったのに命を落としてしまいとても悲しい気持ちになりました。

2 日目は、平和記念式典に参加しました。たくさんの人や外国人の人たちがお花をあげていました。そして資料館で原ばくのキノコ雲の写真や人のはだかとけている像、こげた三輪車など色々見ることができました。

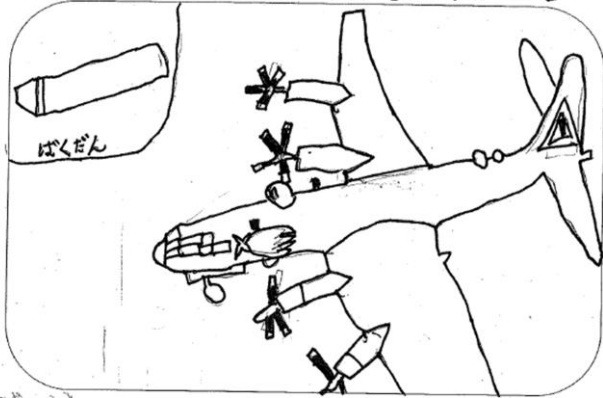
さいご桑本さんというひばくした人の話を聞きました。原ばくでたくさんの死んだ人が川に流れて、死んだ人にハエがたくさんわいたり、すごいにおいがしたとっていました。あと小学校でガラスがささった女の子がいたと言っていました。お母さんは放ししゃのうで血をはいて死んでしまったと泣きながらお話してくれました。

今の日本は戦争が終わって、食べ物や着る物もいっぱいあって自分はとても幸せだと思いました。これからもぜっ対に戦争はおこしてはいけないと思いました。広島の旅は昔の事を知れてとても勉強になりました。

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加した後の広島イメージ



『広島平和の旅を通して』

松浦 華子

毎年8月6日、8時15分、テレビの画面で平和記念式典の様子を目にする度、中学校の時にいった長崎への修学旅行で目にした資料館の記憶が甦り広島も同じような光景だったであろうという想像でしか理解できていませんでした。一度は広島に足を運び、少しでも原爆の事、戦争のことを知りたい、たまたま目にした市報での案内で広島の旅を目にし、子供と共に戦争について学べた事は大変良い経験と勉強になりました。

1 日目は福山市人権平和資料館で見学、福山大空襲の現実を知り、アメリカ軍が爆弾の他に大量の紙の爆弾（空襲予告ビラ）を投下。32都市にまかれ、実際に半数の16都市が空襲された事、また福山で落とされた実弾に触れ、実際に2千発近く落とされた状況は想像をはるかに超えるものでした。

そして6日、平和記念公園や資料館は、日本各地から集まった多くの人達、そして世界各地の方々が献花をし、祈りを捧げていました。戦争の状況を伝える語り部の方が高齢になり、伝える人が少なくなっている。聞きたくても、聞くことができなくなる日が近づいている。その言葉はとても胸にしみました。それと共に今回の旅で感じた事、少しでも周りの人に伝えようと改めて思いました。

実際に被爆体験者の講話では当時の状況を生々しくお話し下さいました。戦争が始まるととにかく食べ物なくなる。小さい頃の思い出はお腹が空いた記

憶しかない、あちこちで死体を焼き、川は亡くなって処理されない遺体にあふれていた。町中がハエだらけ、臭いもすごかった。涙ながらに話してくださいました。放射能をたくさんだし多くの命を奪った原子爆弾、8月6日だけで8万人、2月までに14万人亡くなったそうです。

復興した広島、残っている建物や消えることの無い被爆者の心の傷、平和を守る、核の無い世界を目指し、自分が出来ること、伝えていく事が少しでも出来たらと感じています。

旅に参加する前の広島のイメージ

- 世界遺産の原爆ドーム
- はだしのゲン
- 戦後まもなく誕生した広島焼き
- 復興をとげた観光都市

旅に参加した後の広島のイメージ

- 平和記念式典 想像以上の人で溢れていた。外国の方の姿が多く見られ、核のない世界への感心の高さ、平和を願う人たちの想い一つになり特別な日だった。
- 戦争を二度とおこさない、平和を願う都市
- 緑が多く川に囲まれ美しい都市



『広島にいて思ったこと』

伊藤 和奏

平和記念式典の会場は何百人も入れるようなテントが 10 個いじょうもあってその後ろに入りきれない大ぜいの人たちであふれていました。わたしはお母さんたちと始まる少し前にやっとせきにたどり着きました。

8時 15 分になっていっせいにもくとうをしました。目をつぶっていると、セミの音がすごく大きくきこえてきました。そして 71 年前の8月6日に気持ちタイムスリップしました。この場所にとつぜん原ばくが落とされ多くの人びとがなくなりました。ばく風で目がとび出て、地面が 4000 度や 3000 度になって皮ふがたれ下がって大やけどした人々がここにいたかと思うと急におそろしくなってきました。もし、71 年前に私がここにいたらどうなっていたでしょう。死んでいたかもしれせん。

もくとうの後、広島市長、安倍首相のスピーチや子ども代表の平和へのちかひの言葉がありました。声はよく聞こえましたが、残念ながらすがたは見えませんでした。

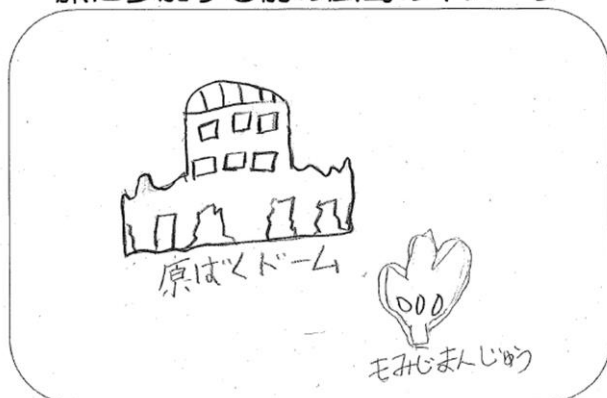
式典の前に原ばくの子の像に行きました。原ばくの子の像の下には、「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界の平和をきずくための」ときざまれていました。

原ばくの子の像は、2歳でひばくして6年生の時に白血病になって8カ月間病

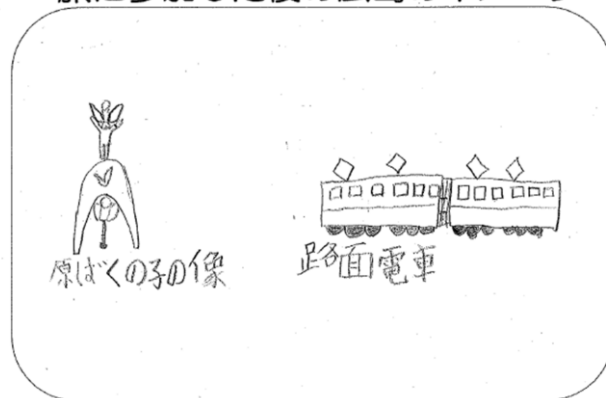
気とたたかってなくなった佐々木貞子さんがモデルになっています。名古屋の高校生から病院に千羽づるが送られてきて、お父さんから千羽おると願いがかなうと聞いて貞子さんもおり始めました。願いはかなわないままなくなりましたが、天国でも世界平和を願ってきつとおりつづけていると思います。

貞子さんの事を知って私も今、つるをおっています。千羽になったら平和がつづくように平和記念公園につるを届けたいと思っています。

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加した後の広島イメージ



『広島平和の旅に参加して』

伊藤 信子

8月6日朝、原爆ドームの前を通り広島平和記念公園内の平和記念式典会場へ。会場周辺には、ピウを配る人、歌に心を込める人、外国からの人、学生、親子など形はそれぞれでも、平和を願う人で溢れていました。8時15分、71年前のヒロシマを思い、犠牲になられた方々の辛さ、無念さを想像すると共に今普通にある平和の有難さを噛みしめました。式典に出席して、毎年8月6日のヒロシマには特別な時が流れ続けているのだと感じました。あの時を決して忘れてはいけない、過ちを繰り返してはいけない～皆の平和を祈る気持ちが見えるようにも感じました。

式典後の広島平和資料館。一発のピカドン投下で地獄と化した惨状、それは想像をはるかに超えるものでした。被爆者の方が直接語って下さった思い出すのも辛いであろう原爆のもたらした苦悩と悲しみ。決してこのような悲劇を繰り返すようなことがあってはならないと強く思いながら、忘れまいと懸命にメモを取りました。

そして今、自分に何ができるかと問うたとき

- ・まず身近な人にこの広島平和の旅で見聞きし、学んだ事を話すこと

- ・子どもたちに折に触れて、機会のあるうちに何度でも曾祖母、祖父母に戦

時中の話をきかせてもらうこと

・戦争、原爆の悲惨さ、惨さ、そして今の平和の有難さを家族で噛み締める
こと

ではないか思いました。事前学習で知ったことを長男に話したところ、その話は早々に我が家に来た祖母に伝わっていました。新学期が始まったら、娘も夏の広島を訪れ平和記念式典に出席した話をお友達にすることでしょう。こうやって、平和について触れる考える輪が少しずつ広がっていけばと思います。

また、広島平和の旅の事前学習で西東京と広島繋がり（原爆の子の像のモデルになった佐々木貞子さんと病院で同室だった大倉記代さんが田無に生まれ平和活動をされていたこと、初代田無市長が広島で被爆者の治療に尽力されたこと、田無駅付近に爆弾が投下され 100 名近くの犠牲者がでたこと）や市民の方の熱心な平和活動を知り、71 年前の戦争と広島と自分が繋がれた気がしました。縁あっていま生活をしている緑豊かなこの西東京の空からも爆弾が突然降って来て、犠牲者が…。一気に身近なこととして想像できるようにもなりました。

今まで平和はあたり前のもの、平和でなくなるということは正直、真剣に考えたことがありませんでしたが、世界中では戦争は絶えることなく、あちこちでテロが起き、日本人の犠牲者も出ています。この広島平和の旅を終えた今、戦争のない平和な世の中はひとりひとりが願い守っていかなければならないものだと強く感じています。

旅に参加する前の広島イメージ

- 原爆投下された後、見事に復興を遂げた街
- 観光都市（宮島、尾道など）
- もみじまんじゅう
- 広島焼き

旅に参加した後の広島イメージ

- 平和を願う人々が集う街
- 緑と川の美しい街
- 郷土愛、団結心の強い街（広島カープ）
- 路面電車が大動脈となっている街
- レモン生産量日本一（全国の約60%）

